

留萌 観光・感動 物語

留萌の夏を一生の思い出に！

ふくしまキッズを迎えて

また会おう

その爪痕を大地に、そして人々の心に残したままの、東日本大震災。

今も福島県在住の子ども達は、その後の原発による放射能の影響で、戸外での活動を制限されています。

夏休みだけでも、思いつき自然を満喫してもらおうと、東日本大震災被災者受入プロジェクトの一環として、この夏、50名余りの小中学生らが2班に分かれて、留萌を訪れました。

受け入れの中心として、また、プロジェクトスタッフのとりまとめ、子ども達のお世話をしていたのが、NPO法人留萌観光協会職員の佐藤雄一郎さん。地域おこし協力隊員として、平成23年度から地域活性化の活動に従事した佐藤さんは、この春に、観光協会職員として新たな一歩を踏み出しました。観光施設の管理、事務処理など幅広い仕事を担っています。

「全行程を安全に終えることができるよう無我夢中でした」と語る佐藤さん。

佐藤さんはプロジェクト全体を管理しながら、ボランティアスタッフとともに子ども達と、とことん遊び、時間を過ごしました。海のない地域で暮らしている子ども達が多く、皆が楽しみにしていたのが、ゴールデンビーチでの海水浴。

海遊びや、スイカ割り、夜には、ビーチでの花火、キャンプを楽しみました。留萌を離れる日、ビデオカメラを回す佐藤さんは、ともに過ごした日々を振り返りながら、子ども達の笑顔撮り続けました。

「最後の夜、みんなで泣いたのに、バスに乗ってからも泣く子がいて、ビデオを映しながら、僕も泣きました」。留萌で出会った人、景色、体験した一つひとつを思い出に、日常の暮らしに戻っていく子ども達。

別れの言葉は、さよならではなく、「留萌でまた会おう」。

留萌の夏をそれぞれの胸に刻んで。



ゴールデンビーチのもいで、打ち上がる花火を見つめる。



食事の時間も子ども達と一緒に。子ども達にも人気の佐藤雄一郎さん。